



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	応永本『和泉式部物語』「とあれば」私注：なぜ、宮は笑ったのか
Author(s)	小林, 理正
Citation	国語国文研究, 163, 1-12
Issue Date	2024-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96089
Type	journal article
File Information	163_1.pdf



応永本『和泉式部物語』「とあれば」私注

——なぜ、宮は笑ったのか——

小林 理 正

一 問題の所在

『和泉式部日記』宮邸入りの場面、女のいるところへ宮がやってくる一節がある。当該部の概略を示すと、次のようになる。

宮が来るといふことで、しばらく自分のいるところの格子は上げずにいる女。それゆえに室内は暗い。恐ろしいといった状態ではないが、いやな感じがする。そういつたさまを察してか、宮は、^くすぐに北の対屋にお移ししましょう。ここでは端近なので心ひかれませんと云う。葎や御簾などの建具を下ろして部屋の中へこもつて人に知られぬよう女が宮の話の聞いていると、^く昼は女房らや院のものと仕える殿上人などが参集して、どうしてこのままでいられますようか。近くで私を見ること（アナタニ）がっかりされると思ふと胸が苦しいのです^いと宮は言葉が続ける。（私モ）そのことを思つておりましたの^いと女が言うので、宮は笑つて、^くまじめな話、

夜などあちらに私が居るような折はよくお氣を付けなさい。不届き者などは覗きもやります。いましばらくしたら、あの宣旨の居るところへいつてらっしゃい。並大抵のことでもないかぎりあちらへは人も近づきません。宣旨のところにも（人ハ来マセン）^くなどと言つて、二日ほどして女を北の対に移そうとするので……。

このように叙述が連れる宮邸入りの場面を『新編日本日本古典文学全集』に拠つて、その本文を確認すると、以下のようになる。

○『和泉式部日記』八二～八三頁²⁾

宮入^いらせたまふとて、しばしこなたの格子^{かかし}は上げず。おそろしとはあらねど、むつかしければ、「今かの北^{きた}の方に渡したてまつらむ。ここには近ければゆかしげなし」とのたまは^{たま}はすれば、おろしこめてみそかに聞けば、「昼は人々、院の殿上人^{てんじやうひと}など参りあつまりて、いかにぞかくてはありぬべしや。近^{ちか}劣^{おと}りいかにせむと思ふこそ苦しけれ」とのたまはすれば、「それをなむ思ひたまふる」と聞こえさすれば、笑は^{わら}せたまひて、「まめやかにには

夜などあなたにあらむ折は用意したまへ。けしからむものなどは
のぞきもぞする。今しばしあらば、かの宣旨のある方にもお
はしておはせ。おほろけにてあなたは人もより来ず。そこに
も」などのたまはせて、二日はかりありて北の対にわたらせた
まふべければ、(後略)

特筆すべき解釈上の不審はないかにもえる。けれども、この箇所
を『新全集』の底本、すなわち三條西家本で見ると、二つの「と
のたまはすれば」に挟まれる部分のないことに気付く。『新全集』は
応永本系統の伝本で欠失を補い、校訂本文を作る。ただし、「もし脱
落であるとすれば、最も長文の脱落箇所である」(八二頁)との言い
ぶりから判断するに三條西家本の脱文とは、しいてみてはいないよ
うである。

この本文の出入りと、「笑はせたまひて」をめぐる表現理解とが関
係してくる点に注目したい。『新全集』は「女が自分にも近劣りの心
配があるといったので、宮は笑った」(圈点是小林／八三頁)と読み解
く。しかしながら、この「近劣りの心配」云々は、二つの「とのた
まはすれば」の間にある本文「近劣りいかにせむと思ふこそ苦しけ
れ」という宮の言葉を承けている。三條西家本を読む場合、当該本
文はないわけだから、宮が笑った理由にならないと考えるのが自
然だ³⁾。では、応永本系統の伝本は、どのようにこの箇所を語ってい
るのか。京大本に拠って同じ箇所を掲げ、応永本系統の本文の様相
を確認する。なお、私に句読を切る、清濁を区別する、鉤括弧を付
すなどの措置を本文に施したが、表記は原本のものを尊重した(以
下同)。また、丁数は墨付丁数で表示した。

○ 京大本・五七丁オ〜五八丁オ

宮いらせたまふとて、しばしこなたのかうしなどあげず。おそ
ろしきことにはあらねどむつかし。「いまかきたのかたにわ
たしまいらせん。爰にはちかければ、ゆかしげなし」などのた
まはすれば、おろしこめてみそかにきけば、「ひるは人々、院
の殿上人などまいりあつまりて、いかにぞかくてはありぬべし
や。ちかおとりいかにせんとおもふこそくるしけれ」とのたま
はすれば、「それをなん思給へる」とあれば、わらはせ給て、
「まめやかには、夜るなどあなたにあらんおりは、ようしいたま
へ。けしからぬものどもはきもぞする。いましばしになりな
ば、ひるなどは、あのせじのあるかたにおはしておはせ。丸が
ひるあるかたはひとよらずぞ」などのたまはせて、二、三日
ありてきたのかたのたいにわたらせ給へば、(後略)

※ 「思給へる」の「へ」は「ふ」の誤写と思しい
『新全集』の校訂本文と京大本の本文とを見比べると、いくつもの
違いが目につく。といつても、その叙述は両本ともにおおむね同様
である。そのため、『新全集』と同じく「ちかおとりいかにせんとお
もふこそくるしけれ」という言葉をそのまま承け、「それをなん思給
へる」と女が言つたゆえに宮は笑つた、このように読み解くことも
できようか。だが、『新全集』(三條西家本)「と聞こえさすれば」と
あつたのが、京大本には「とあれば」とあつて、その本文形態が異
なる点を無視すべきではないだろう。片岡美幸は「言ふ」について
の敬語「きこゆ」と「のたまふ」の代行者「とあり」で済ませてい
る箇所が(応永本系統二八)多くあり、そういった傾向は「応永

本の特徴といえる」と指摘している。この見解を踏まえるとき、「それをなん思給へる」と女が「声」で宮に伝えた、という読み方を支持することになる。⁶⁾しかしながら片岡の見解には、問題に思われる箇所がある。それは同論稿が『岩波古語辞典』の語義、すなわち「他の動詞の代行をする。①《助詞トを受けて引用の意を表わす》……と言う。」とあるのを手掛かりとして表現を分析した点だ。同辞典「あり」の項には見られないが、「とあれば」には「声」による意思伝達をいうほかに「文字」で言葉が伝わることをいう用法も確認される。たとえば「うつは物語」蔵開上「中納言、「何」ことにか待らむ。見侍らばや。」「人に、な見せそ」とあれば」とて見せ給はねば」(四五―四六頁)⁸⁾とあるのは、そういった例に該当している。このように「とあれば」には二つの理解がある。近年では、辻本桜介によってその諸相が検証され、整理されてもいる。⁹⁾

宮が笑った以上、「それをなん思給へる」という女の言葉は彼に伝わっている。それだけに「声」か「文字」、そのどちらかで言葉が宮に伝達された点は動かない。二とおりの読み方が「とあれば」に可能な中で、充分な吟味を経ず、一方の解釈でその理解を決しているとするならば、その読解態度は些か問題があるように思う。「声」で、または「文字」で伝わる、この差異は意味上の違いはもちろんだが、場面理解にも違いをもたらすものといえる。それゆえに、その解釈の見極めは読解上必要だと考える。

また、この「とあれば」は「わらはせ給て」の理解とも関わってくる。「とあれば」とありながら、『新全集』同様、女の発言ゆえに笑ったと読み解いてよいのだろうか。女の動作のために宮が笑った

と考えられはしないだろうか。それこそ「ちかおとりいかにせんとおもふこそくるしけれ」と宮が言ったのに対して、「それをなん思給へる」「とあれば」、すなわち紙か何かに「(私毛)そのことを思っておりましたの」と女が書き記して応じてみせた。——こうした応酬ゆえに宮は笑った、というような解釈の余地があるのではないか。このような問題意識のもと、応永本『和泉式部物語』「とあれば」の精査と、「宮の笑い」が如何なるときに起きるのか、これらの分析をつうじて如上の私解、その可能性を本稿では探っていく。

二 「とあれば」の語感

「言ふ」についての敬語「きこゆ」と「のたまふ」の代行を「とあり」で済ませている箇所があるという片岡の指摘は、そうした異同が平安文学に確認されることから安易に斥けるべきでない。たとえば『源氏物語』若紫巻の「いで君も書いたまへ」とあれば、「まだようは書かず」とて見上げたまへるが何心なくうつくしげなれば」(①・二五九頁)¹⁰⁾の一文にある「とあれば」は、源氏が若紫(後の紫上)に「声」で「いで君も書いたまへ」と伝えたことが明らかな例だ。この「とあれば」に相当する本文が、河内本および別本(中山本)では「とのたまへば」になっている¹¹⁾。上述伝本はいずれも鎌倉時代の写本である。鎌倉時代、片岡のいうような表現の代行・交替は本文揺動史上、既に起こり得るものであったと知られる。けれどもこうした事象が確認されるからといって、「とあれば」のいずれもが「きこゆ」や「のたまふ」を代行していると読み解かねばな

らない道理はない。たとえ表現史上、代行・交替現象があり得ようとも、各例の検証、それじたいは必要な手続きとしてあり続ける。そこで本節では応永本の「とあれば」の精査をつうじて、当該語の解釈幅を見定めようと思う。

以下に掲げるのは、和歌の代作を宮から女が依頼される一幕の本文である。

○ 京大本・三〇丁ウゝ三一丁オ

かくて、つごもりがたにぞ御ふみある。日比のおほつかなさなどいひて、「あやしき事なれど、しのびて物いひつる人なんとをくいくなるを、あはれといひつべからん事、ひとついはんとらんおもふ。それよりのたまふ事のみなんさはおほゆるをのたまへ」とあり。あなしたりがほとおもへど、「さはえきこえじ」と申さむもいとさかしければ、「のたまはせむことはいかゞ」と許に、

「おしまるゝ涙にかげはとまらん心もしらず秋はゆくともまめやかには、かたはらいいたき事になん侍る」とて、はしに、
「つごも、

君を、きていづちゆくらん我だにもうき世。中にしひてこそふれ」

とあれば、「思やうなりときこえさせんも、みしりがほなり。あまりぞおしはかりそへ給へる。

うちすて、たびゆく人はさもあらばあれまたなき物にきみし思はゞ

ありぬべくなむ」とのたまはせたり。

九月の月末近く、宮から文があつた。そこには和歌代作を依頼する旨が記されていた。女の返事は「おしまるゝ……」という和歌と、気恥ずかしいことだと感じている旨に加え、もう一首「君を、きて……」というものであつた。女からの返答を受け取つた宮は、希望どおりの歌だと言いますもの、和歌に通じているような風です。歌は、あまりにうがちすぎでしょう」と言い、返歌と付け加えの一言を添え、返事とする。女からの贈歌と代作歌は「つごもりがた」にあつた「御ふみ」への返信として届けられていたから、ここの「とあれば」は「文字」で記されてあつたことをいう表現と考えられる。早朝、辺り一面に霜が真つ白に降りている時分、宮からの手紙が届いた場面を確認する。

○ 京大本・五〇丁オゝウ

またの日のつとめて、霜のいとしろきに、「さていまのまはいかゞ」とあれば、

「おきながらあかせる霜の朝こそまされる物はよになかりけれ」

などきこえかはす。れいのあはれなる事なか、せたまひて、

「われひとりおもふは思ふかひもなしおなじ心にきみもあらなん」

御返、

「君はきみわれはわれともへだてねば心／＼にあらん物かは」

宮から「いまこうしている間は如何（オ過ゴシデスカ）」とあれば、女は「おきながら……」などと詠んで「きこえかはす」。「きこ

えかはす」じたいは、対面での会話にも、手紙などを介した間接的なやり取りにも用いられる表現である。そのため、当該表現を手がかりとして「とあれば」の理解を深めることは難しい。しかしこの場面、宮と女は同じ場に居合わせてはいない。だからこそ、女の様子を気かけ、「さていまのまはいかゞ」と宮は訊ねるし、その言葉を承ける女は「おきながらあかせる霜の朝こそ」と詠み、独り起き明かすつらさを訴えもする。女と「きこえかはす」うち、宮は「れいのおはれる事など」を「か、せたまひて」、返歌を寄越すわけだから、二人は手紙のやり取りで話をしていくと知られる。こここの「とあれば」もまた「文字」による意思伝達をいうと分かる。

以下の例も「文字」で言葉が伝わるケースとして読み解けよう。宮邸入りを決心したにも関わらず、その思いが揺れてしまう女。どうすればよいのか思い乱れる女は、宮に歌を寄越す。こうした叙述を受けての一幕が、次のものである。

○ 京大本・五三丁ウ〜五四丁ウ

「なにのたのもしげなき事なれど、つれづれもなぐさめに思
たちつることを、さらばいかにせまし」などおもひみだれてき
こゆ。

「うつ、にておもへばいはんかたもなしこよひのことを夢
になさばや

と思給れど、いかゞは」とて、はしに、

「しかばかり契りし物をさだめなきさはよのつねに思なせ

とや

くちをしくも」とあれば、御覧じて、「これよりこそまづとおも

ひかへりつれ」とて、

「うつ、とも思はざらんねぬる夜の夢にみえつるうき事
どもを

おもひなさなん。あな心みじかや、

ほどしらぬ命ばかりぞさだめなき契しことはすみの江のまつ
あがきみや、さらにあらまし事、きこえじ。人やりならぬ、も
のわびし」とぞある。

※ 「つれづれも」の「も」は「の」の誤写と思しい
「うつ、にて……」という歌と言葉に加え、女は「しかばかり……」
という歌に「くちをしくも」と言い添える。これを「御覧じ」た宮
は返事をしたためる。「御覧じ」たとある以上、女の言葉と和歌は目
で見える形態で宮に届けられていた。「文字」の形態を採っていた
と考えられる。

都合、三例の「とあれば」をここまで確認してきた。そのいずれ
も「文字」で言葉が伝わることをいうものであった。ただし挙例は、
手紙でのやり取りであることが明らかなものばかりであった。「そ
れをなん思給へる」とあれば」について言えば、そうした手がかり
が一切ない。それだけに「文字」で言葉が伝わったとする読み方を、
おいそれと認めることはできない。「声」で伝えられたと読み解け
る「とあれば」も応永本には当然ながらある。

○ 京大本・一四丁オ〜一五丁オ

女、道すがら、「あやしのありきや。いかに人おもふらん」とお
もへど、あけはの、御すがたの、なんてのにはあらざりつる
御さまも思いでられて、

「夜ひごとにかへしはすれといかて猶暁をきは君にをさせし
くるしかりけり」とあれば、

「朝ごとにおくる思にくらぶればたゞにかへらんよひはま
されり

さらにく、る事きかじ。よさはまふたがりけり。むかへ
にまいらん」とあれば、「あなくるし、つねには」などおもへど、
れいの車にておはしたり。さしよせて、「はやく」とあれば、
「さも見ぐるしき事かな」とおもふく、ゐざりいで、のりぬれ
ば、よべの所にて物語などし給。

※ 「なんて」の「ん」は「へ」の誤写と思しい
この場面には「とあれば」が三つある。宮に連れていかれた「人
もみぬ所」（二三丁ウ）からの帰路、女が寄越した文には「夜ひごと
に……」という歌に続けて「くるしかりけり」とあった。これを受
け取った宮は「朝ごと……」と詠んで「さらにく……むかへに
まいらん」と記し、返事とする。宮の返事を確認した女は、みつも
もないことだなどと思う。一つ目と、二つ目の「とあれば」は、こ
こまで確認してきた例と同様に読み解くことができる。三つ目の
「とあれば」が問題になる。女のもとに改めてやってきた宮は車寄
せに車を近づけ、「はやく」とあれば、女は見苦しいことだと思
う。この「はやく」という言葉が文面で伝えられたとする場合、
または従者をつうじて発せられた言葉と読み解く場合、女が「さも
見ぐるしき事かな」と思うだろうか。ここは「はやく」と、
に出して急かす宮の有り様を女が見ているからこそ「さも見ぐるし
き事かな」という思いが、女の心情として活写されている。このよ

うに読み解くのが表現理解として穏当だ。

二つの解釈、そのいずれのパターンも応永本『和泉式部物語』には
認められる。それゆえに当該表現の精査からのみでは、問題の「と
あれば」の解釈を定めることは困難と言わざるを得ない。

三 「宮の笑い」と、「とあれば」の読み方

いずれか一つへ解釈に決しようとするさい、「とあれば」にだけ注
目していても埒が明かない。そこで本節では「それをなん思給へ
る」とあれば、宮が笑った点に注目する。というのも、「宮の笑い」
が如何なときに起きるのか、この分析が「とあれば」の相対的な
理解、その析出につうじると予測されるからだ。「それをなん思給
へる」とあれば」という表現が、どのような動作として受けとめら
れた結果、宮は笑ったのか。この点が明らかになると、「とあれば」
の解釈もおのずと定まってこよう。

「それをなん思給へる」とあれば、わらはせ給て」とあった例を
除くと、『和泉式部物語』諸本および『和泉式部日記』で宮が「わら
ふ」用例は、次に掲げる一例のみと僅かである。童の遅参に端を発
する一悶着が語られる場面の一節を確認する。

○ 京大本・四三丁ウ

「けさ、したりがほにおほしたりつるもいとにくし。このわら
はころしてはやとまでなん」とて、

「朝日さすいまはきゆべき霜なれどうちとけがたき空のけ
しきぞ」

とあれば、「ころさせ給へかなるこそ」とて、

「君はこずたま／＼みゆるわらはをばいけとも今はいはじとおもふか」

うちわらはせて、

「ことはりや今はころさじ此わらはしのびの妻のいふことにより

まこと手枕の袖といふことをわすれ給ぬるなめりかし」とあれば（後略）

遅参した童を「ころしてはやとまでなん」と思っているという宮は「朝日さす……」と書いた文を寄越してきた。もちろん、本気で言っているのではない。これに女は「お殺しになるおつもりだと」と記して、「君はこず……」と返歌する。あなたは来ないし、たまにやってくる童にまでも「いけとも今はいはじ」、生きよとも、文を届けに行けとも今はもう言うまいと思われるのですか、と応酬してみせる。この返歌を受け取った宮は笑って、前言撤回の旨、さらなる和歌でもって伝えてくる。童の処遇をめぐるやり取りが和歌を介して語られる点に、この場面の勘所はある。「ころしてはやとまでなん」と書いてきたのに対し、文面を取りなすのではなく、歌で切り返してみせ、かつ宮の訪れの少なさを責める女のやり口に宮は笑い、「ことはりや」とさえ歌に詠み込みもする。この思いがけない機智に富む女の行動が契機となって、宮は笑ったと考えられる。

「わらふ」用例が僅かであることから、その類例として「はゝゑむ」も確認しておこう。宮邸入りが近づくさなか、数多くの和歌がやり取りされる場面の一節を掲げる。

○ 京大本・五四丁ウゝ五五丁オ

ひるつかたある御ふみをみれば、

「あなこひしいまもみてしか山がつかきほにおふるやまとなでしこ

あな物ぐるをし」とうちいはれて、御返、

「こひしくはきてもみよかしちはやふる神のいさむる道ならなくに」

と申たれば、うちほゝゑませ給て御覽す。

和歌を贈答するさまが語られているが、両者ともに古歌をそのまま書き記して送りあっている。宮は『古今集』歌（卷一四・恋四・六九五・よみ人しらず）を、女は『伊勢物語』（七一段）の歌を手紙に記す。自分自身と同じ手口、古歌をもつて返歌とした、その女の応対に宮は「ほゝゑ」んだ。女の当意即妙な動作と「宮の笑い」とが結びついている事例と判断してよからう。ちなみに、宮の言葉をずらして受けとめ、応酬するケースは作中にいくつもある。けれども、そのとき宮は笑わない。単なる切り返しでは「宮の笑い」は生じない。女の発言、その内容に起因するのではなく、女の動作・応対が「宮の笑い」を引き出す。——これが『和泉式部物語』『和泉式部日記』の表現論理のようである。ふつうでない女の行為・応対に機智や興趣、おもしろさを見て取ったとき、宮は笑う、あるいは笑むと推測される。

ここまでの検討を踏まえたうえで「とあれば」の解釈を見定めたい。女が「声」で「それをなん思給へる」と伝えたと解するのが、従来の読み方である。女と宮は同じ場に居り、直接に言葉を交わせ

たから、如上の理解、それじたいに無理はない。しかしながら、そのように読み解くとき、「宮の笑い」を引き出すおもしろさは女の発言に由来することになってしまい、「とあれば」に見出されるものではなくなる。その一方で、対面している女が、紙か何かに書くなどして、文字で返答していたと読み解いてみると如何か。思いがけないその女の行動は「おろしこめてみそかに」話を「き」くほどの用心深さを、さらに煎じ詰めたかのような動作として宮の目に映る。ふつうでない女の行動に宮はおもしろさを感じ取り、さすがに「わらはせ給」。宮以外に漏れ伝わらないような方法、すなわち、文字による会話を試みた女のとつさの判断は、当意即妙な、機智に富むものであったと言つてよい。なればこそ「宮の笑い」は生まれたのであった。

思えば、宮が「まめやかには」と話を続けるのも、冗談かと思わせるほどの、予想だにしない女の行動——「それをなん思給へる」とあれば——に対し、話題を本筋に戻すための一呼吸、そのタイミングで口を衝いて出た言葉であったからなのであろう。

四 まとめ

「ここまで応永本『和泉式部物語』の「とあれば」の精査および「宮の笑い」の生起要因の検討をつうじて私解の可能性を探ってきた。従来、他系統本の本文——「とき」えさすれば（三条西家本）、「と聞こゆれば」（寛元本系統）、「ときこゆる」（混成本系統）——と照応することから「とあれば」は「きこゆ」「のたまふ」を代行したも

のと考えられ、¹⁴で言葉伝えたことをいう表現として読み解かれてきた。だが、実際は「文字」で「それをなん思給へる」と伝えたことをいう表現として、かつ「宮の笑い」を引き出す動作として「とあれば」は作中に位置づけられていた。私解の成り立つ余地はあるように思われる。その是非については大方の御批正を仰ぎたい。ところで『和泉式部物語』『和泉式部日記』、いずれの系統、いずれの伝本で作品を読んでも「宮の笑い」を引き起こす、その要因は同じである。となると、「とあれば」といふ三条西家本・寛元本系統・混成本系統の本文からはテキストが結構する作品論理、すなわち「宮の笑い」の表現理路を読み取れないのではあるまいか。解釈の問題と、本文の問題との結節点になっていると予測されるが、その吟味には更なる調査・研究を要しよう。この点、今後の課題である。¹⁵

ちなみに「とあれば」の解釈、その異なりにかかる場面理解の揺れは他作品にも見出される蓋然性が高い。さらに言えば、当該表現と同様の問題は「とて」にも確認される。「とあれば」と同じく解釈如何が場面理解に差異をもたらすものである。「とて」についても再検証が必要だ。¹⁶

【注】

- (1) いま通行する理解に拠って叙述を辿っているが、この宮の発言をめぐる別解もある。たとえば古賀典子・三田村雅子校注・訳『紫式部日記 和泉式部日記』日本の文学 古典編 17（ほるぷ出版、昭和六二年）では「女が、近くから姿を見

られて評判を落とすこと」(三八七頁)、「近い所で姿を見られ
などして評判を落とすようなことがあつてはと思うと気が気
ではありません」(三八九頁)という注解が示されている。こ
の場合、女の近劣りを宮が心配する意となる。ただし、その
どちらの理解であつても、その後、女が(私毛)そのことを
思つておりましたの、と言う点は同じである。

(2)
藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『新編日本
古典文学全集』(平成二〇年四刷)、『和泉式部日記』の校注・
訳者は藤岡忠美。

(3)
三条西家本を底本に採る諸注の中には、次のような説明をも
つものがある。やや長くなるが、その全文を掲げる。

○ 円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記 改訂版』(至文
堂、昭和五八年)三三七頁

○それをなん思ひ給ふる——(私もまた)そのことを氣
に病んでおります。三条西本(底本)では、遠く「しば
しこなたの格子はあげず。おそろしとはあらねど、む
つかしければ」といった女の氣持もひびいてくることに
なる。宮としては、もちろん自分がおちつけない部屋だ
から「ここには、近ければゆかしげなし」といったには
ちがいないが、多分に女への氣兼ねやいたわりの氣持を
こめて発言している。女にしてみれば、宮邸にがあつた
ばかりで、この部屋がいやだとはあらわにいえないうち
場のはず、「いえ、御心配なさらぬように。ここでもよろ
しいのです」ぐらゐの返事を宮は予想したかも知れない。

ところが女は率直に「それをなん思ひ給ふる」とあらわ
に心を示したのである。それだけに「むつかし」と思つ
ている、ゆとりがない女の氣持を表にみせたことになる。
そんなゆとりのない、一途に「むつかし」と思つてい
る女を見て、宮は笑つたのである。「正直だね」といった氣
持であらう。

「近劣りの心配」云々を読み取らずとも、この箇所の読解が
なされている。こうした読み方もあることから、本文の欠失
を脱文としない見方が生じるのであらう。もちろん、諸
注によつて、当該本文をめぐる理解は揺れている。

(4)
「應永本をもとにしながらも、群書類聚本も見だし、三條西
家本も見だし、宮内庁圖書寮本も参照し」て編まれた木枝増
一『和泉式部日記』(修文館、昭和二年/津本信博編『日記
文学研究叢書 第三卷 和泉式部日記』クレス出版、平成一
八年再録)は「それをなん思給へる」とあれば、わらはせ給
て」に相当する箇所を「私も、それを心配してゐるのでござ
います。」と申しあげる。宮はお笑ひになつて、「(二〇四頁)
と読解している。ただし、「語法的にも、語彙的にも、忠實な、
原文の逐語譯ではない」(序)とあるから、当該表現の核とな
る語感を訳出しているものと推定される。また、応永本系統
の伝本(図書寮本)を底本に採る由良琢郎『和泉式部日記全
釈』(明治書院、平成六年)は「私も、そのことを心配申し
ているのです」と申し上げると、お笑いになつて「(三一八頁)
と読み解く。「とあれば」を「と申し上げると」と解釈する点、

『新全集』の理解と軌を一にしている。

- (5) 片岡美幸「和泉式部日記応永本の特質」(「相山国文」八号、昭和五九年)。

- (6) 「とあれば」とある箇所を寛元本系統の伝本(飛鳥井雅章本)でみると「と聞こゆれば」とあり、混成本系統(桂宮本)には「ときこゆる」とあつていずれも「声」で宮へ伝えている。諸本群の本文様態は、岡田貴憲・松本裕喜編『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成(勉誠出版、平成二九年)を参照されたい(六六〇頁)。

- (7) 片岡の参照する『岩波古語辞典』が、どの版かは明示されていない。稿者の手許にある初版本と増訂版(八刷)で確認すると、どちらにも「**③**他の動詞の代行をする。①《助詞トを受けて引用の意を表わす》…と言う。」(初版本・六九頁／増訂版・七一頁)とある。「文字」による意思伝達がなされる用法の記載は、同書には無かったか。

- (8) 室城秀之『うつほ物語四 現代語訳付』(KADOKAWA、令和五年)に拠る。

- (9) 「中古語における引用表現「…とあり」について」(『日本文学研究』第七三卷一号、令和三年一〇月)。辻本は、平安文学に見られる「とあり」用例の吟味から、その意味内容を検討し、「とあり」を意味的観点から八つに分類する。その中でも「①書記内容(手紙・和歌)」「書かれた言葉を用いるもの」が「文字」による意思疎通にあたる用法になろうか。なお「③書記内容が発言内容かが曖昧なもの」もあるとし、それらは「使

者を介しての伝言などが多いようである」と注している。「とあれば」が「声」あるいは「文字」、そのいずれで言葉を伝えるのか、解釈が揺れるのは、こうした事例の存在も関係しているか。

- (10) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(小学館、平成六年)に拠る。

- (11) 池田亀鑑編『源氏物語大成』(中央公論社)、加藤洋介「河内本源氏物語校異集成」(和泉書院、同「定家本(別本) 源氏物語校異集成(稿)」(http://www.2kansai-u.ac.jp/ok_matsu/))などに拠って異同を確認した。

- (12) 伊藤鉄也編『四本対照和泉式部日記——校異と語彙索引——』(和泉書院、平成三年)に拠って、各系統本がいずれも用例数が同じであることを確認している。

- (13) たとえば『新全集』は「女が周知の古歌を以て適切に古歌に答えたので、宮は満足の笑いを浮かべたのである。女は宮がいくら情熱を吐露しても、実際に訪れてくるのではないことを知っており、言葉のあやの応酬によって恋のあやを二人は楽しんでいる」(傍線は小林／七九頁)と注している。また、たとえば高木智史「和泉式部日記『古歌贈答の位相』」(『平安朝文学研究』復刊第一七号、平成二二年三月)は「宮」も「女」が自分の意図を理解して返歌してくれたことで、「うち笑む」、「戯れにおけるやり取りの中で、度を越した戯れが笑いに繋がる例であろう」(傍線は小林)という。女の応対、それじたいが「宮の笑い」につながったと考える点は稿者と理解

を同じくしている。

なお、大倉比呂志「伊勢物語的世界への憧憬——七一段との関わり——」(同「平安時代日記文学の特質と表現」新典社、平成一五年／初出・昭和五〇年五月)は「(男)の側に立脚して語られている『伊勢物語』の恋の世界を、『和泉式部日記』ではそれが(女)の側に転移されて語られようとしたのだといえよう」(二六九頁)と指摘する。こうした仕掛けに宮が興趣を感じ取ったと読むことは可能であるかもしれない。実際、近藤みゆき『和泉式部日記』(角川学芸出版、平成二〇年七月・第三版)は「女の引用歌は本来男の立場の歌で、誘いかけの表現も大胆。語句も呼応しかつ大胆な誘いの歌を選んだ女の才気に思わず笑みがこぼれた」(七八頁)と注し、大倉説を受け入れている。しかし、ここに確認されるおもしろさは和歌に付随する文脈(詠者)の挿げ替えにかかるものであって、女の動作に由来しない。したがって、この詠者の性差の「転移」に宮が笑ったと読み解くのは難しい。

辻本(注(9)に同じ)の理解に拠って説明すると、「引用内容が主体から受け手へと伝達される動作を表す用法」で「とあれば」が解釈できるということになる。

たとえば森田兼吉「和泉式部日記三系統本 성격 序説」(同『和泉式部日記論攷』笠間書院、昭和五二年／初出・昭和三六年六月)では、応永本系統・寛元本系統・三条西家本系統の三つの系統が共通祖本(A本)から発生し、のちに分化したと説明する。寛元本系統と三条西家本系統はA本より派生し

(16)

たB本からさらに枝分かれしたものと推定されている。こういった見解を承けるとき、本来「とあれば」とあったものが、寛元本系統と三条西家本系統では書き換えられたという伝流過程を推定したくもなる。しかしながら、大橋清秀「異文発生の過程についての考察」(同『和泉式部日記本文の研究』和泉書院、平成三年)が述べるように、その書き換えは「和泉式部日記の本文全体を統一にある意識のもと書きかえられたのではなくて、書写の過程においてある部分ある部分に限って集中的に類型的な書きかえがくりかえし行われ」(二〇二頁)、「飛び飛びに思い付いたままに書きかえが行われたものごとく、このことは応永本のみならず、寛元本においても、また時によつては三条西本においても同様であったと考えられ」(同)もする。それだけに先述したような推定には慎重にならざるを得ない。作品解釈と本文の問題が交わる箇所は、作中まだある。そうした点の考究が積み重ねられたのち、改めて諸本論の問題と合わせた検討を試みたい。

小田勝「事例詳解 古典文法総覧」(和泉書院、平成二七年)を確認すると、「とて」から掬いあげられる「と」言つて「や」と思つて「の」解釈は「文脈上読み取られるものであ(五二九頁)」という。それゆえに本文や場面理解、それじたいの再検証をつうじた再読が必要となつてこよう。ちなみに小田は「と書いて」と読み解く事例を紹介しないが、たとえば『源氏物語』常夏卷(『新全集』③・二四八―二四九頁)に当該例で解釈できる「とて」が確認される。一定数の用例が平安文学に

はあるものと予測される。なお『実例詳解古典文法総覧』補遺稿＋源氏解説」第一二二回 (<https://www.izumipb.co.jp/news/139998.html>)／令和四年八月一五日)においても「書いて」と読み解けることへの言及はない。

※

『和泉式部物語』『和泉式部日記』の本文は、以下の資料に拠った。なお、本稿では特記しないかぎり、京大本に拠って『和泉式部物語』の本文を掲げた。

● 京大本……遠藤嘉基『応永本 和泉式部物語』京都大学国語国文資料叢書四（臨川書院、昭和五三年）。——応永本系統。

● 雅章本……吉田幸一『和泉式部全集 資料篇』（古典文庫、昭和四一年）。——寛元本系統

● 三条西家本……鈴木知太郎解説校異『和泉式部日記』（武蔵野書院、昭和三八年・第八版）。——三条西家本系統
● 桂宮本……国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム（宮内庁書陵部蔵『扶桑拾葉集』（77-20-127））。——混成本系統

【附記】

本稿は、JSPS 科研費（23KJ1989）の助成を受けた研究成果の一部である。

（こ）ばやし ただまさ・北海道大学大学院講師）